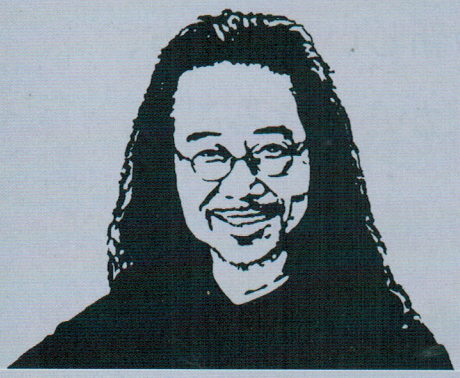

連載第7回

Audio Nex

サブスクリプションとダウンロードが音楽産業を支える日に向けて

Text
杉山
Tomo

ットラジオが想を超えて快適だ

3月末、御茶ノ水と秋葉原の4箇所に分かれていた校舎を全て引き払い、御茶ノ水駅前に新築されたビルに引越しをした。僕のオフィスのオーディオ機器達も、そのまま新オフィスに持ち込まれた。これを良い機会だと思い、オフィスでのオーディオの中核となるプリアンプ部を、384KHzまで対応するZodiac Goldにした。決して安いとは言わないけれど、性能に対するコストパフォーマンスは素晴らしいと感じている。

仕事の大半はパソコンに向かうことでできる現在、僕の執務時間は結構長い。好みのCDを聴くこともあるが、家でCDを選んでオフィスに持ってくるのは、結構面倒くさい作業だ。そんな中、アメリカのデンバーに本拠があるネットラジオ「SKY・FM」を、ほぼ四六時中流すようになった。絶妙なジャンル分けで60ほどのチャンネルが設定されている。気分によってジャンルを変えられるので、とても聴き勝手が良いのだ。早速、年会費49・9ドルのプレミアム会員になってしまった。

ネットラジオなんて音質が聴けたものじゃないだろうと思われるだろうが、これはどう使うかの問題だ。バックグランドミュージックとして流しているので、比較的小さい音での再生。その状況では、満足の行く音が出ている。人間の聴覚は、大きな音で聴くほど、低音から高音までフラットな特性に近くなり詳細な音質の違いも聴こえてくる。当然、ハイレゾ音源で音楽ソースに対峙しようという時は、音量もかなり上げて聴き込んでいる。

さて「SKY・FM」では、40Kと64KでHE・AACフォーマット、さらに128KAACと256KMP3が選べるのだが、僕のセットでは128KAACが、256KMP3より、しなやかな音質で良かった。

「Spotify」が年内に日本でサービス開始予定

そうこうしているうちに、四大レコード・レーベルであるソニー、EMI、ワーナー、ユニバーサルも契約した定額で音楽聴き放題の「Spotify」が年内に日本でのサービスを始める予定とのニュースが入ってきた。2008年にスウェーデンで誕生した「Spotify」は、すでに欧米では爆発的な人気となっている。アメリカでは月額9・99ドル。広告つきの無料サービスもある。なんと言っても、クラウドにある2000万曲以上の楽曲を、スマホ、タブレット、PCなどで、ストリーミングで聴くことができてしまう。これは驚異的としか言いようがない。実際のユーザーに訊いたところ、ストリーミング開始までの待ち時間は驚くほど短いという。さらに好みの楽曲があれば、それをダウンロードして、自分の機材への保存もOKなのだ。

クラシックなら、同じ楽曲で、異なるプレーヤーやオーケストラの音楽ソースが、いくつも選べてしまう。ポピュラーなら参加するレーベルのヒット曲は全て聴くことができる。これで年間、1万2000円ほどとなれば、リーズナブルだ。

しかし、音楽が、日々の生活の消耗品として安っぽく扱われていることに嘆く方もいるだろう。僕も、そのような側面は否定しない。一方、これは「音楽なしには生きられない」という地球上の多くの人々にとって夢のような生活環境への第一歩とも言える。

Spotifyのサイトによると世界で2400万人以上のアクティブユーザーが存在し、内600万人が有料会員。もちろんこの数字は日々増え続けている。日本の音楽ソフトの売上は2012年度、約3530億円で全世界で1位となった。これを月額1000円の有料会員費と想定してみると、3000万人の有料会員がいれば賄える数字だ。国民全員がスマホを持つのも時間の問題という環境の中、ここ数年とは言わないが、未来のどこかの時点で、これからいくつも出てくるSpotifyのようなサブスクリプションモデルが音楽産業を支えるビジネスモデルと成り得ることも否定できないのだ。

常に最高のハイレゾ音源を追求する本誌の読者の方々は、最高峰の音質を持つ音楽ソースがネットから配信されるための安定した仕組みを構築する実用実験が刻々と行われていると、現在の状況を解釈しても良いと思うのだ。未来の方向は示されたというわけだ。

音楽好きだからこそ、音質にこだわる姿勢でいる私には、人生の残りの時間で音楽を聴くことができる総時間が気になってきている。あまりにも聴き逃している音楽が多いと思うからだ。個人的には、まだぎりぎりアナログテープで残っている名演奏を、DSDマスタリングして、有料ダウンロードモデルで、どんどん配信して欲しいと願っているのである。

オフィスのオーディオのコントロールセンターとして鎮座したZodiac Gold

「Net Audio」の命名者
杉山知之

デジタルハリウッド大学学長。工学博士。日大助手の頃「六畳間のオーディオ学」を『季刊オーディオアクセサリー』誌にて執筆して話題に。同誌にて「コンピュサウンド」を1990年代より連載し、ネットオーディオ文化の足場を作った。